

第 2 回 定 期 研 究 会

SGST発足25周年シンポジウム

詳細は「SGST発足25周年シンポジウムの記録」参照

SGST

発足 25 周年記念

SYMPOSIUM

「土木構造物と環境」

主催： **S G S T**

共催： 土木学会中部支部
日本鋼構造協会



土木学会認定 CPD プログラム(入場無料)

場所：メルパルク名古屋
JR および地下鉄「千種駅」直近

日時：平成 15 年 6 月 27 日(金)
13:00~17:00 この後懇親会

SGST 25 周年に寄せて

名誉代表 福本 晴士

1978 年 4 月に本会が設立されて、すでに四半世紀が経過した。設立のそもそものきっかけは、1978 年当時 ASCE ST 誌上に Galambos 教授らがレベル I の信頼性理論に基づく鋼構造設計法を 8 編の論文によって発表し、その中で鋼材、鋼部材の強度の統計・確率的処理による荷重・抵抗係数値を提案したことに、刺激を受けたことから始まる。

東海地区の土木鋼構造分野の大学研究者を中心に、鋼構造物の抵抗強度に関する設計フォーマット (SGST Format) を提案し、終局強度設計規準の試案を発表した。

Galambos 教授らの提案は、その後 AISC (1986)、AASHTO (1994) の構造設計規準へとつながる。また、Eurocode 3 (鋼構造・EN1993) は 1978 年の欧州鋼構造連合 (ECCS) の鋼構造規定への勧告に従い、欧州規準 (CEN) としての継続審議がなされた。前段階にある構造設計規準案 (prEN) も四半世紀を経た 2003 年には全ての最終案が出そろってくる。いよいよ欧州規準としての正式なスタートも間近い。また、これらは ISO 規準へとつながる。

SGST の当初の目標は大きく、アメリカ、欧州との時間差もそれ程大きいとは感じなかったが、ことここに至ると、わが国の構造設計法の統一化への険しさが目立つようになる。

各地域の技術交流に密着した委員会活動は、会員の技術レベルの平均値をあげることにあり、以前に聞いたことがある。これでは活動を続ける活力を持続するのに不足がある。産学官会員の相互連携による技術ネットワーク構築と、そこから生まれる先端技術の育成を SGST に大いに期待したい。

記念シンポジウムについて

シンポジウム実行委員会

21 世紀に入り、インフラとしての土木構造物に対する課題はさらに厳しく、土木構造工学は、学術的にも実務的にも大きな変革を求められています。このような時代に SGST は発足 25 周年を数えることになりました。そこでこれを機会に、今後の土木構造工学のあり方を会員外の皆さまも含め一緒に考えようと、今回のシンポジウムを計画しました。

「土木構造物と環境」を主題とし、まず基調講演 1 では、総論として藤野陽三教授より、土木構造物の諸問題に関する今後の展望を述べていただきます。基調講演 2 では、各論として、川入健二氏より、構造物資材である鉄鋼材料の循環に視点を定め、鉄のグリーンとしての特徴と課題について述べていただきます。

これを受けパネルディスカッションに移ります。最初に二人のパネリストから話題提供があります。伊藤義人教授からは、「環境負荷低減型土木構造物に関するこれまでの取り組みと将来展望について」、佐野奨氏からは、「リサイクルの観点からのセメント/コンクリート材料に関して」、であります。

この後、コーディネーターの宇佐美勉教授の司会により、基調講演者も含めたパネリストの議論に加え、会場の皆様方のご質問やご意見もいただきディスカッションを行い、最後にコーディネーターのとりまとめで終わる予定であります。皆様のご協力により、実り多いシンポジウムとなることを希望しております。

プログラム

- 司 会 実行委員長 塩見弘幸(中部大学)
- 13:00~13:10 開会挨拶 名誉代表 福本暁士(福山大学)
- 13:10~14:00 基調講演 1
「環境の変化の中での構造工学の今後の展開 ―研究、実務とそのブリッジ―」
東京大学工学系研究科社会基盤工学教授 藤野陽三 氏
- 14:00~14:50 基調講演 2
「鉄鋼建材と環境負荷」
新日本製鐵 ㈱ 建材開発技術部マネジャー 川人健二 氏
- 14:50~15:00 休 憩
- 15:00~17:00 パネルディスカッション

コーディネーター	SGST 常任理事 宇佐美勉 (名古屋大学)
パネリスト	前掲基調講演者(○ 藤野陽三氏、○ 川人健二氏)
	○ 太平洋セメント㈱ 中央研究所 佐野 奨 氏
	○ SGST 常任理事 伊藤義人 (名古屋大学)

閉会の辞

実行副委員長 小澤一誠(日本車輛製造㈱)

プロフィール

藤野陽三氏

最近の主な研究テーマは、橋を中心とした社会基盤施設について、特にその動的現象の解析と設計への応用、構造物のライフサイクルアナリシスなど。国内の各種委員会はもとより、ロンドンモレニアム歩道橋の振動問題へのアドバイザー、香港ストーンカッター斜張橋の設計アドバイザー、イリノイ大学地震工学拠点センター評価委員、国際誌 5 誌の編集委員を務めるなど、国際的にも活躍。

川人健二氏

新日鐵㈱入社後、製鉄水道設備の開発・設計・建設、海外における製鉄設備の立ち上げ、酸洗廃水を利用したソフトフェライト原料製造プロセスの開発、建設分野の環境負荷低減に関する企画・検討、土壌汚染、処分場向けの鋼製鉛直遮水壁の新商品開発などに従事。日本鉄鋼連盟「建設環境委員会」幹事、日本鋼構造協会「鋼構造物の環境負荷調査研究委員会」幹事などを務める。

佐野 奨氏

太平洋セメント㈱入社後、セメント産業および新技術の環境負荷評価に関する研究などに従事。土木学会コンクリート委員会「コンクリートの環境負荷評価小委員会」委員、土木学会構造委員会「低環境負荷土木構造物の新技術開発に関する課題検討小委員会」委員、産業環境管理協会「環境効率調査委員会」委員などを務める。

宇佐美勉

名古屋大学大学院工学研究科土木工学教授。最近の研究テーマは、鋼構造物の耐震・制震設計や性能設計。日本鋼構造協会「鋼橋の性能照査型耐震設計法検討委員会」委員長、土木学会「座屈設計ガイドライン改定委員会」委員長などを務める。日本鋼構造協会から「土木構造物の性能設計ガイドライン」を発刊(平成13年10月)。

伊藤義人

名古屋大学大学院工学研究科教授、名古屋大学附属図書館長、名古屋大学評議員。最近の研究テーマは、低環境負荷構造物のライフサイクルアナリシス、性能設計のための構造材料、構造部材、および構造物の耐久性特性など。土木学会構造工学委員会「低環境負荷土木構造物の新技術開発に関する課題検討小委員会」委員長などを務める。



<http://homepage2.nifty.com/sgst/>

沿 革

1978年(昭和53年)4月: 福本啓士(名古屋大学教授)により「東海鋼構造研究グループ」創設。構成員は愛工大、名大、名工大、名城大、大同工大、中部工大(現中部大)の鋼構造研究学者グループ。主として鋼構造部材の抵抗強度の信頼性評価に関する研究が行われ、その成果が発表された。

1984年(昭和59年)8月: 構造全般を扱うことにし「東海構造研究グループ」と改称。官公庁、企業、教育機関からの多くの新規会員の参入があった。

1986年(昭和61年)11月: 初代代表福本啓士の大阪大学移籍により、長谷部宣男(名古屋工業大学教授)が代表に就任。

1991年(平成3年)4月: 宇佐美勉(名古屋大学教授)代表就任。

1995年(平成7年)4月: 梶川康男(金沢大学教授)代表就任。

1997年(平成9年)4月: 山田健太郎(名古屋大学教授)代表就任。

2001年(平成13年)4月: 塩見弘幸(中部大学教授)代表就任。

2003年(平成15年)4月: 事口寿男(大同工業大学教授)代表就任。

発足以来、SGST 内での研究会の開催とその成果の外部発表、会員による外部講演会の開催、さらには、拡大研究会を全国の研究者へ呼びかけ、その成果を「SGST 拡大研究会論文集」として発刊、等々を行ってきた。